

導の意識は拒絶され、不断に活かされようとしたのは、大衆自身の自発的な意思であった。そこでは、徹底した自由な討論を基礎にして、直接民主主義的な運営が貫徹され、それ自身が自治管理的な社会運営を予告した。それらの運動体が、まだ漠然とだが未来に期待していたのは、本質的には自治管理社会であった。そこに私は、現代革命の主題、主体、行動の型態を見る。そして、それらについては、次章以下で論じてゆくことにしたい。

第二章 教育の告発と “学ぶ”ことの革命性

五月革命がパリ大学ナンテール分校に端を発していたことは、繰り返して言うまでもあるまい。そして、五月十日から十一日にかけての、いわゆるバリケードの夜を経過して、運動が労働者を含むフランスに波及するまでは、学生の動きだけに限られていたこともすでに書いた。その学生の運動は明らかに政治的なものであったが、しかし彼らの運動は、初めから純粹に政治的なものであったわけではない。それ以前に大学固有の問題、教育の問題に取組んでいた時期があった。そして、五月革命を推進した、いわゆる怒れる若者たちは、大学の告発、教育の告発を通じて、社会の全面的な告発という政治の領域へと入ってゆくのだが、ここではまず、どのような形で教育が問題とされたのか、それをみてゆくことにする。

五月革命に先立って、フランスの大学はどのような問題をかかえていたのか。大学はさまざまな批判を浴びていたが、それは二つの側からの批判に大別できる。第一は、大学が現代社会の要請に応えていないという、産業界、テクノクラートからの批判であり、第二は大学の階級的性格をつく、革命を推進しようとする側の批判であった。

それら二つの批判についてはエドガー・モーランの次のような的確な要約がある。

現行の危機を理解しようとするに当って、二つの型の解釈がある。一つは行政や大学当局の公的機関内で行われているもので、学生の不満の原因を教授の世界の半封建的な古臭さ、諸要求に対する大学の老化と立ち遅れ、就職先と実用性に対する教育の不適合のうちに求めようとする。

つまり、大学の欠陥は生活と現代世界への不適合の中にあり、対策はそれを適合させること、すなわち、古臭さを清算し、教師、施設、設備の手段を増大し、方法を刷新し、学生たちに（風俗の変化に対応する）自由な、健康なキャンパスを提供し、就職を保証することなのである。

それと違ってもう一つの解釈は、大学を現代生活に適應させようとする学生の意志を説くものではなく、卑俗な、凡庸な、抑圧的な、圧制的なとみなされるブルジョア社会への彼らの拒否を説く。強調されるのは栄達の道の追求ではなく、彼らを待ち受けている専門的な幹部としての栄達の道の拒否であり、できるだけ早く成人社会に入ろうとする意志ではなく、不純な社会への全体としての異議申立てである。（週刊「ル・モンド」一九六八年五月十六〜二十一日号）

ここには、大学の現情に対する二つの立場が見事に浮彫りにされているが、第二の立場に立つ五月革命を推進した学生たちの批判を紹介する前に、それを理解しやすくするために、まず大学の実情をもう少し詳しくみてみることにしたい。

大学は、本来伝統的なものであって、新しい世代に対して過去の文化的遺産を伝えるという意味からいっても保守的なものであるが、フランスの大学については、特にその古臭さが指摘されている。フランスの現在の大学制度は、十九世紀初期のナポレオン一世時代に確立されたものであって、十九世紀末に改革が行われてはいるものの、本質的には大して変ってはいない。フランスの大学は、「実験室ではなくて博物館」といわれているように、十九世紀のブルジョアにふさわしいものと見なされていた文化的パターンを維持し継承することが、依然として中心になっていたのである。

そこで、学生は、将来の研究者として、将来の大学教授として教育される。たとえば、将来の教授としてふるまうにはどうしたらいいのか、説明の技術、方法、形式をめぐる規準を教え込むことが軸とされていた。しかし、産業化と大衆化の波が、そうした伝統的な大学の基礎を揺がすことになる。まず学生の数が急速に増えてゆく。しかし、それに対して教員や施設は拡大しない。教員の数は、教授の権威維持のために、ほとんど増員されない。その結果、少ない教授団への権力の集中が現われる。教授たちは授業とともに学位論文の審査に忙殺される。それでもその特権を放棄しようとはしない。そうして、アラン・トゥレーヌによれば、「知識をもって生きる人間が権力に酔う人間」変貌する。

教員が少なければ、教育は必然的にマス・プロ的なものにならざるをえない。講義はもったいぶったものであって、学生の側からの積極的な意欲を呼び起すものではない。特に五百名ないし千名

の学生を割り当てられた講義は、お粗末な見世物にすぎない、といわれるようなものとなる。したがって、ここでは、教えるものと教わるものとの間のコミュニケーションは存在しないし、存在のしようがない。

それは、学生にとって堪えがたいものであるが、同時に教授にとってもやり切れないものであった。そこで教授たちは、大学での職務の外で、自分の研究によって渴きをいやそうとする。一方、学生は学生で、大学の中で、自分自身を高める、自分の力を開発する、何らかの研究や探究にかかわっているという感情を持たなくなる。学生はどうなるか。知識ではなくて、試験科目にだけ専念するようになる。「自分に興味のあるものを何か発表し、自分の知識を示し、自己自身の力を自ら体験しうるだけ十分多方面にわたる自由な活動を選びだす手段を全く」持たない。したがって大学に対して学士免状しか期待しないということになる。

しかし、それらの学士免状は、現代産業社会が期待しているものとは違った、旧態依然たる知識修得の内容に与えられている。そこから、もっと現代社会に適応した形で、産業に役立つ人間を送りだすべきであり、そのための措置をとらなくてはならない、という産業ブルジョアジー、テクノラートからの要求がでてくる。そして、この線にそって六六年六月より、フーシェ改革と呼ばれる教育制度の改革が進められることとなるが、それは新しい生産技術に適応した専門技術者を養成することを本質的な目標とし、専門化と選抜制強化を特徴としたものであった。

この大学のいわゆる近代化の推進とは別に、あるいはそれに抗して、五月革命を推進した革命者

たちは一層本質的な批判を提示する。それは、大学の階級性の追及である。教育が支配階級の支配下にある、そしてまた、支配階級の権力の維持を保証している生産・組織・管理をめぐる大規模なシステムの支配下におかれている状況の批判であり、大学が社会的な批判の機能を欠いていることへの批判であった。

それはまた、「高度に工業化された社会の経済体制が要求するものになりきれだけの十分に訓練された学生を、大量に作り出すことに専念する工場に変わった、あるいは変わろうとする大学への批判である。いいかえるなら、「大学は免状の工場であり、教授は、生産要員として社会機能の階級的構造の中に位置していること、学生は生産品にすぎず、試験によって品質保証のラベルをはられる商品になりつつある生産品である」という実態に対する批判であった。

しかも、そうした大学教育を貫いている階級の性格についての批判は、単に概念的になされたわけではなく、一部では、実際に受けている学習の分析を通じて行われた。それがかなり「近代化」された部門でなされたことは興味深い事実である。

たとえば、ナント大学では六八年二月に心理学科からの脱退を呼びかけられ、次のようなビラが、ナントの街の壁という壁に貼りだされた。

心理学はその総体において、個人の行動を社会的疎外態である一般的な諸価値に適合させることを唯一の機能としているので、

アメリカの社会心理学の方向への心理学の現在の過度の発展は、無条件の消費という、受け身であることによって労働者の経済的な直接的な搾取を完成しながら、体制を完全なものにする、現行社会の内的な論理に答えるものである。

社会心理学は、理想として公然と認められている一般的な諸価値の正当化の作業であり、現実についてのイメージの恐るべき歪みを正しいものとする道具である。

心理学の使用は、一面では労働者の闘争を解体する試みとして（対話の《理論家たち》を見よ）、また一面では職業の、学校の指導の中で現代の全般的な肯定が尤もであることを確認する明確な事例として考えられるので、

多くの学生たちが心理学の最近の性格を意識しないで、特に現代社会におけるこの職業の快適な反響（？）に誘惑されて心理学の道に入ってきているので、

心理学の全面的な拒否は、欲望の汚れなき、創造的な平静さ、賭け、諷刺、祭、あるいは……の中で確められる自由の貞潔さの、有無をいわずぬ明示なしには考えられないので、

UNEF支部は、すべての心理学の学生たちに彼らの学科から脱科することを訴える。

またパリ大学ナンテール分校では、社会学科の学生によって、「なぜ社会学を専攻するか」が問われ、社会学の歴史が分析され、初め哲学の臣下として存在したアカデミー社会学の、科学的意図をもった独立した社会学への移行は、自由競争的資本主義から管理化された資本主義への移行と対

応していること、それ以後社会学の発展は、ブルジョアジーの諸目的、すなわち、金、利潤、秩序の維持などに奉仕する合理主義的な実践を求める社会の要請に次第に結びついていったことが明らかにされた。

こうして、与えられた学問の内容の追及とともに、五月革命以前の学生の闘争は、ナンテールにおいては、大学内での学生の自治の要求と試験に対するボイコットという形でも現われた。自治の要求は、大学の寮内での規則を認めないという行為によって表明される。寮は、男子寮と女子寮とに分かれていて、女子は男子寮を訪問できるが、男子が女子寮を訪問することは規則によって許されない。そのため、六七年三月に、男子学生が女子寮の一つに侵入して、一夜を過すという事件が起きる。これは性的な自由の要求であるとともに、学内での基本的な生活条件を学生自身の手で決定しようとする意思表示であった。そして、大学の諸規則についていえば、最も先鋭な学生たちの間では、それは、知識の専門家たちが自分たちの階層制を強固にし、自分たちの凡庸さに対する攻撃の一切を弾圧する手段にすぎないこと、大学の正常な運営とは大学のイデオロギーと機構とを言外に受け入れることであり、それを受け入れることは、支配階級の欲求に応じた弾圧体制の存続を受け入れることだ、という認識が存在していたことに注意しておきたい。

試験については、現行社会の幹部要員選抜のシステムとして批判されている。試験は、社会の階層制を維持するものとされ、その階層制は、大学においては免状の発行によって象徴される。免状の存在が、社会における地位、第一級の地位が学生たちに留保されていることを告げている。しか

し、それは誰にとつて残されているのか。小学校から、支配階級によってそのエリートを濾過するために設けられた、多くの障壁を乗り越えた人々に対してである。したがって、試験のシステムに対する批判、この階層制を補強するシステムに対する批判は、初等教育、中等教育を含めた、教育制度全体を改めようという批判につながってゆく。

更にまた試験について、それが恫喝的な手段であり、学生の創造性や責任性を失わせるものであって、画一主義を学生に強いるものである、という批判も出されている。学生は、そうした恫喝の下で、勉強を続ける間、受身の状態に入ってゆく準備期間を生きているのであり、その後、全面的な受身の状態の中で引受けることとなる決定的な役割に備えているのだ、という、現在の学生の立場の哀れさも強調される。

それらの批判は、確かに適切なものであり、現行教育制度の本質をついているという意味で革命的な性格を帯びているが、しかし、ここで私の不満をのべておけば、免状制度そのものの廃止に触れていない点で徹底を欠いている。学生が哀れな状態に在るとしても、彼らが学士号をえて手に入れる社会的な地位は、フランスのような階層的差別の強い国では特に、ほかの一般青年労働者の地位に比べればまだ特権的な地位にあるわけで、その点からみると、単に試験を問題にするだけではなく、免状制度そのものを廃止する要求が見られなかったことは、なぜなのか理解に苦しむ。五月革命の過程で、学生に対して、未来の搾取者であり特権的消費者という一時的な寄生者であることを止めよう、といった種類の呼びかけはさまざまな形でなされる。しかし、その未来の搾取者であり特権

的消费者であることを保証するもの、免状制度の廃止、免状の廃止という要求は、私の知りえた限りでは学生の間からはでていない。それは、そうした要求をだしては、一般学生の中で孤立するという戦術的な配慮によるものか、それとも特権的であることを自ら拒否しようとする態度が不十分であるのか、それはよくわからないのだが、この事実を私は残念なことに感ずる。免状制度の廃止は、大学および大学を頂点とする現行の教育の階級的機能を根本的に変える鍵だ、と思われるからである。

しかし、そのように不徹底なものを含んでいたにしても、五月革命を推進した学生たちは、自分たちが置かれている立場を貫いている階級的な論理を追及し、その過程で次第に政治化してゆく。そして運動が全く政治化された段階で五月革命が迎えられるが、五月十日のバリケードの夜ののち、特に十三日にソルボンヌが、十五日にオデオン座が占拠されて、ソルボンヌ、オデオン座を始め、各地の大学は、社会のあらゆる面に対する異議申立てのための夥しい討論集会の場と変わり、そこでは、あるべき教育の姿、あるべき大学の姿についてのイメージがさまざまな形で提起された。

そして、あるべき教育の姿として、与えられる教育の拒否、個人個人の創造的能力を開発する教育の必要が主張された。そのため、幼稚園から高等教育までの一貫した建て直しが求められ、初等教育では、参加、対話の欠如が子供の好奇心を抑圧し、熱意を破壊する結果を招いていること、中等教育では、少年期に必要な責任と発意を育てることが欠如していること、それらの結果として、大学に入ってくる学生たちは、対話することを知らず、何らの総合的な精神も、勉強の方法も持た

なくなっていることが指摘され、重要なのは習うことではなくて、理解し、総合し、分析する知的労働の方法を獲得することであり、それを可能とする教育であることが強調される。

理想の大学については、民衆と純粹の学問に仕える反社会の中心であるというイメージが提出される。たとえば、大学情報収集センターのビラは、「既成の秩序に異議を申し立てるといふ役割は大学に帰するものである。大学はもはや、社会の将来の幹部をつくる役目を持つ、知識の自動的分配機などというものではない。大学は、批判と対決の手段なのであって、そこで研究が仕あげられ、そこから創造が溢れ出るのである」とのべているし、パリ大学法学部の「自治と共同管理」委員会の報告は、新しい大学について次のように主張している。

大学が独自にもっている役割は次のとおりである。

——万人に対し、平等かつ実際に開かれている教育形成にもとづく効果的な社会奉仕。

——絶えざる異議申し立ての中心となること。

——文化と科学に関する異議申し立ての中心であること。

今日われわれが参加しているこの運動は、自発性を維持すべきであり、同時に組織化されてその成果を強化すべきである。

——公権力と私的利益によっておびやかされている大学の独立を、強固なものとなしうるであ

ろう自治、

——大学内部の権力を、関係者総体の間で分散させるであろう、大学の共同管理、

——学内で、批判と絶えざる異議申し立ての実行を保証しうるであろう手段の総体、が挙げられる。

たとえばまた、発行地不明の「構造と共同管理」委員会の一般報告は、次のような大学の型態を考慮している。

1 万人に大学を開放すること。そのため、

(a) だれでも、大学に入学できる機会が平等にあたえられるよう、初等・中等教育の構造を改革すること。

(b) 勤労学生または常時勉強できる学生が、みずからの希望と能力と動機に従って研究進路や選択科目や研究期間などを自由にえらぶことができるようにすること。

2 万人に大学を開放するための現実の可能性をつくり出すこと。

(a) 大学における永続的な形成の機能（研修——補足的な教育）により。

(b) あらゆる年令の労働者が、研究の全期間にわたって聴講しないでも、みずからの興味にもとづいて、あるきまった領域の知識をうるることができるようにすることにより。

しかし、こうした要請は、現在の体制の中ではユートピア的なものにならざるをえない。したがって、実際には、五月革命の敗北ののち、人民夏季大学という形で、パリ大学の各学部が行なった、労働者と学生とをまじえた自主講座が、新しい大学のイメージをごくさやかな形で実現することとなる。

これらの、教育の告発と新しい教育の構想の提起、それ自体は有意義なことではあるが、わが国の大学闘争の過程にも見られたことであって、それだけについていえば特にユニークというものではない。しかし、五月革命は、教育に関してはもつと重要な、一層根源的な提起を行なっている。それは、与えられた教育ではなく、自主的に自分の能力を開発してゆく、学ぶという姿勢を政治行動の実践の中で貫いた、ということであって、それをのべるためには、三月二十二日運動の中に見られたものを語らなくてはならない。

ナンテールの社会学教授エビステモンは、三月二十二日運動の指導的原則を二点に要約して、①教えるものと教えられるものとの間には本質において相違はないこと、②《運動》は、それが望み、それが到達することをあらかじめ可能とする、なんらの知識も政策として持たないこと、であったとし、同運動形成の思想的な背景を物語る、以上二点についての解説を次のようにのべている。

第一のものは、教えるものと教えられるものは、ある柵の両側に分けられているという伝統的

な見方と矛盾する。この見方は、教えるものは知識の側にあり、教えられるものは無知の側にあるとする。その結果、両者の関係は階級化され、上から下への縦の線が生まれる。教えるものは、彼が部分的な知識をしか伝えることを望まない相手、無知なものに対して話しかけるのである。六八年五月は、この図式への異議申立てを一般化した。……それ以来、教えるものと教えられるものは、同じ場に、柵の同じ側に、（ときにはバリケードの同じ側に）いる。

彼らは知識を持ったぬものの中にいるのである。彼らはいずれも学ばねばならない、ともに学ばなければならぬのである。知識は、ある何らかの領域において、ただ一人の人によって知られる総体的な知識だという限りでは、それは瞞着であるとして告発された。知識は、社会同様に、創りだされるべきものである。この二つの目標が熱狂をかきたて、青年のエネルギーを動員した。彼らの間では既成の知識をつめこもうとする考えは意欲を失わせたのである（傍点筆者）。

政治の実践の場合も、教育の実践と同じであった。政策として何ものかを知ることが主張する、組織と教義とを備えた既成の諸党と対立して、《運動》は現行社会の拒否と同時に、組織化することの拒否と教義化することの拒否を確認することを止めなかった。破壊しようとする社会をいかなる社会によって置き換えるか。《運動》はそれを知らず、この間に異議を申し立てた。まず破壊しよう。そして、現在想像しうる社会とは全く違った社会を発明するであろう創造的な噴出をとき放つのである。

《運動》は何ものも予想せず、何ごとも予言せず、何ものをも阻止しない。それは、その目的

とその戦術とを日々決定した。あらゆる革命は予測しえない展開をしたのではなかったか。革命が生んだ結果は、その企図とはいっても違っていたのではないか。したがって自然発生主義が原則とされる。というよりむしろ、自然発生主義はまず拒否、としてのべられた何かしらのもの、積極的な内容と見なされたのである。

更にエピステモンは、ここに見られる三月二十二日運動の基本的な理念が、突然発生したものでなくて、ナンテール分校における社会学の新しい教育の中で生まれていたことを語っている。ナンテールの社会学科は、殊にアンリ・ルフェーヴルの存在によって著名であるが、ここでは教えることは行なわれず、エピステモンによれば、「教官は何一つ強はず、何一つ組織しない。クラスは自治管理によって機能する。教官は言葉の二重の意味で△アシスト▽する。彼はクラスに出席し、クラスをエキスパートとして補佐する。教官は彼の知識を生徒たちの意向に委ねる。彼は内部の交流と紛争との調整を確保する」だけなのである。教官が学生たちといっているのは、「もはや彼が知っていることを教えるためでも、予定表を処理するためでもなく」学生たちが「彼と社会問題の討議の訓練をしながら、実践を通して行動する社会学者となること」を援けるためであった。

そして、このナンテールの社会学科の教官たちの間には、ある理念が底流として存在していた、とエピステモンは指摘しているが、それはきわめて重要なものであり、エピステモンによれば、一九五〇年代にカール・ロジエという教育学者が次のように要約した理念であった。

一、教えることは不可能である。

一、他人に教えることは、すべて大して役立たないものであり、それはほとんどその人の行動に影響を与えるものではない。

一、真に興味があるのは、個人の行動に有意義な影響を与えうる知識である。

一、個人の行動に影響を与えうる知識は、本人自らが発見し、わがものとした知識である。

一、個人によって発見された知識、個人的な、経験の中でわがものとされた真実は、直接他人に伝えることはできない。

一、いわゆる教育の結果は、とるに足らないものか、有害なものである。

一、したがって、問題なのは常に学ぶことである。

一、すべての教育は放棄されねばならず、大切なのは何かしらを学ぶことを学んだ人びとが集まることである。

一、試験は価値のない知識をしかはかれないので廃止すべきである。

一、免状も廃止すべきである。それは何かしらの終りないし結末を示すが、学ぼうとする人間は、体験による認識の絶間ない過程を追求するからである。

一、結論をのべることは放棄されねばならない。結論によっては有効な知識はうることはないから。

さて、ここに語られている理念の中には何か驚嘆すべきものがないであろうか。ここには現行社会、否、およそ支配を基軸とする一切の社会を、根底から崩壊させるダイナミトのような爆発力が秘められていないであろうか。ここでは絶対的な知識は否定されている。すでに存在する尊重すべき、あるいは強制されねばならないような知識は否定されている。知識は常に更に追求されるものとして示され、最終的な知識は否定されている。知識は各個人が自ら発見すべきものとされている。知識は各個人が自らの責任で体得する以外にはないものとされている。その限りでは人間の間にいかなる差別も認められていない。最終的な知識を持つものとして權威づけられる人間は否定され、何人も平等なものとして扱われている。ここではいかなる階級関係も否定されている。教えるもの・教えられるもの、指示するもの・指示されるもの、支配するもの・支配されるものの関係はすべて否定されている。

しかし現行社会の秩序は、経済的、物理的、心理的な抑圧のもとに、あらかじめ存在する無数の知識を、尊重すべきもの、あるいは強制されるべきものとして各個人に受け入れさせればこそ成立している。ひとたびそれらが否認されたらどうなるであろう。現行社会はまた、無数の階級関係の上に成り立っているが、それは他人を指揮する知識、その内実がどうであれ權威として機能する知識を持つものと、それに服従するものとの間柄を、当然のものとしている前提があるからである。その前提がひとたび否認されたらどうなるであろうか。ここには現行支配関係の心臓部につきつけられた鋭い刃がある。

そうした意味で、三月二十二日運動が、教えるものと教えられるものとの間には本質的に相違はない、という見方を実践したこと、ナンテールの社会学科の教官たちの間に見られた、教えることは不可能であるという立場で教育を考える姿勢は、五月革命の過程で見られた教育に対する告発と同様に、むしろそれ以上に重要なものである、と私には思われる。

そして、この理念が社会変革の意志として現われた場合、革命運動における統制の否定、革命を遂行する運動体内部における指導の排除、直接民主主義への要求につながるし、一切の支配関係の廃止を目指すものとなる筈であり、それについては次章において触れることとなろう。